

第三百七十六回 青葉会

平成二十九年七月二十七日(木)

午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 川口孤舟 久米五郎太 豊田ゆたか 中野一灯 山内天牛
 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 星田啓子
 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子 渡邊盛雄
 赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 後藤保明 小西弘子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎
 早川允章 福島正明 M H氏 村田くに子 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

九点

☆ 手の蛍見知らぬ女(ひと)の手に移す

(☆↓「てのひらの蛍を見知らぬ女(ひと)の手へ」)

堂哉 (猛・万・彦・保・龍・灯・正・天・三)

八点

◎ 家猫が知る涼風(すずかぜ)の通り道

☆ ◎ そうかもう君はいないか夏銀河

(☆↓「然(さう)かまう君はゐないか夏銀河」)

恵洲 (眞・猛・孤・千・灯・M・正・天)
 ゆたか (堅・猛・万・孤・五・弘)

六点

☆ 黙々と梅を干している妻の背や

(☆↓「黙々と梅を干し次ぐ吾妻の背」)

健介 (眞・堅・万・保・龍・天)

五点

☆ 書生つぼさ抜けぬ畏友と暑氣払

☆ 朝顔が今朝も挨拶窓越しに

(☆↓「朝顔のお早う今朝も窓越しに」)

紀久男 (堅・万・眞・龍・ゆ)
 猛 (眞・万・保・千・ゆ)

☆ ◎ ソプラノの胸元張りて夏舞台

(☆↓「胸の張り佳し」)

五郎太 (孤・彦・保・正・三)
 ゆたか (猛・万・孤・弘・灯)

☆ ◎ 海鞘(ほき)噛めば三陸の汐香り立つ

(☆↓「海鞘噛むや三陸の汐の香りたつ」∴原因結果的活用をしない)

一灯 (万・孤・ゆ・敏・く)

☆ 風鈴に嬰(やき)ゆつくりと笑ひけり

(☆∴嬰兒の笑いの形容に「ゆつくり」はたいへん相応しい)

けい子 (猛・万・五・龍・M)

眼底に夏の海有り手術室

☆ ◎ 夏歌舞伎海老蔵親子宙を行く

(☆↓「宙を行く海老蔵父子や夏歌舞伎」∴三段切れを避けたい)

全 (紀・五・保・弘・ゆ)
 天牛 (眞・紀・万・孤・敏)

四点

たそがれの街影絵めく蚊食鳥

腕白のつんつるてんの藍浴衣

☆ 雲海の波立つかなた富士浮かぶ

(☆↓「雲海の波立つ彼方富士浮かび」)

孤舟 (彦・五・允・三)
 全 (彦・弘・允・天)
 一灯 (万・千・ゆ・充)

◎ 子らはしやぐホースの水で虹立てて

老優の藝談酒脱夏座敷

☆ ◎ 砂浜に日焼け女子寝てウエルダン

◎ 舟唄や緑したたる最上川

☆ 落陽を背負ひヨットの戻り来る

☆ 昼寝にも快気祝いの酒の夢

(☆∴「祝い」↓「祝ひ」)

☆ ほろ酔いも流れる汗に失せる宵

(☆∴「酔い」↓「酔ひ」)

☆ 西瓜切るそよとも吹かぬ風の花

☆ 星祭妻迎船漕ぎ出づる

(☆↓「七夕や妻へ漕ぎ出す迎船」)

☆ 気怠さやラテン音楽夏夕べ

(☆↓「夏夕べ気怠しラテンのリズムすら」)

三点

啓子 (紀・万・龍)

孤舟 (敏・允・天)

忠彦 (紀・万・ゆ)

全 (孤・千・敏・M)

全 (堅・紀・敏・く)

全 (万・孤・千・灯)

全 (紀・五・敏)

全 (万・彦・三)

全 (万・保・く)

二点

☆ 羅(うすもの)で語る実らぬ恋の果て
☆ 汗したたる初金星の業師かな
(名古屋場所の宇良)

けい子 (万・龍・く)
紀久男 (万・允)

黎明の朝顔市の湿りかな
幾千の底紅落つる闇深し

孤舟 (真・天)
五郎太 (紀・正)

☆ 青田波寄する青松驚翔てり
(☆↓「青松へ青田波寄せ驚翔てり」)

一灯 (万・く)
恵洲 (紀・M)

洗ひ髪吹く夕風やリンスの香

全 (千・M)
昇 (万・孤)

☆◎ 向日葵の群れの視線を受けて立つ
(☆↓「群生の向日葵としばし真向ひぬ」)

けい子 (五・M)
天牛 (紀・万)

下駄音や遠く近くに祭の夜

全 (千・M)
天牛 (紀・万)

☆ 古戦場三方ヶ原の新じやが来(く)
(☆…下五↓「新馬鈴薯(しんじゃが)来」)

盛雄 (万・孤)

☆◎ 人智及ばぬ虚しさや夏出水
(☆↓「虚しさや人智の及ばぬ夏出水」)

盛雄 (万・孤)

一点

沖繩に呑まれし田畑梅雨長し
夏猛る南も北も区別なく

盛雄 (正・天)
そらお (猛)

☆ 涼しげに父子の宙乗り大当たり
河鹿鳴く銀山湯宿に飲みあかす

全 (弘)
紀久男 (万)

☆ 汗みずく頭ヒリヒリ今日此頃
茄子漬や憂いを忘れて酒すすむ
(☆…中七↓「憂ひを忘れ」)

全 (万)
猛 (万)

七夕紙に「じいじなおれ」と読める文字
ロツキーの曲聴き通院汗塗(まみ)れ

忠彦 (三)
全 (紀)

林立のヨット太陽族の浜
おならだと孫の喜ぶ夏休み

孤舟 (灯)
五郎太 (紀)

☆ 鳳凰の襟章輝る大暑かな
無力なる己悟るや出水川

全 (三)
健介 (堅)

☆ ダイビングしなふ手足の美しく
(☆…中七「しなふ」↓「撓ぶ」)

ゆたか (万)
全 (M)

雲の峰崩れ耀(かがよ)ふ富士の嶺
百日紅手折るやパキリと音のして

全 (灯)
啓子 (彦)

☆ 水茄子の口一杯の甘さかな
☆ 墓(ひき)の貌久方振りに玄関に
(☆↓「玄関に久方振りの墓の貌」)

けい子 (く)
天牛 (万)

万緑や生死一瞬の山津波

盛雄 (紀)

●次回青葉会

八月二十四日(木) 午後六時〜九時 築地「紅蘭」(HP参照)にて暑気払句会

▲当季雑詠五句 投句二句 会費ラ長
九月二十八日(木) 文京区民センター

一 今回は天牛さんから7名出席。 投句12名。 紙上選句は先生含め14名。 孤舟選者から実施することになった社友会HPの特別企画「季節の写真を見て、一句！」の掲載頁二枚のコピー配布。 秋の風景写真三枚（写真部の榎原等さん撮影）を見て句を作って投句を募ることにつき協力要請。 万里子先生からの一筆箋、芳博さん奥様からのお手紙等を回覧。 小生の山形土産、純吟「親父の小言」（福島浪江町の酒蔵が山形の蔵を借りて造った）と「最上の夢」を賞味し乍ら開始。 猛さんの司会で御覧のように堂哉さん恵洲さんが高得点。 ゆたかさん健介さんも好成績でした。

二 関係者近詠

葉芽花芽太古から日々背伸びして	万里子	憂さ払はんとてがむしやらに髪洗ふ	恵洲
風も無く音無く落つる乙女椿	全	—NHKラジオ7月8日放送	西村和子選
曇天に基地への轟音待降節	全	（スタジオの選者から電話入り「生出演」）	
野蔭の葉裏返り通し上水縁り	全	チューリップ一輪仏花を明るくす	恵洲
季移りの速さや明日は花祭	全	—「NHK俳句」七月号	西村和子選
花散るや宙を左へ地を右へ	全	呑み込めぬ話も飲んで心太	正明
天心の満月おぼろ米寿祝	全	世の中は付かず離れず水すまし	全
手間の詫び添へて小鯨を手渡さる	眞希子	今暁は穏やかに寄す夏の波	全
新築の若木を鼓舞して鯉幟	全	（劉暁波氏の死を悼みて）	
母在せば表札は亡父君影草	全		
母の胸にしやくり泣き沈め若葉風	全	一村をすつぱり包む夕立かな	允章
皮剥けば姫と呼びたき初筒	全	深閑と真昼の園や夾竹桃	全
白百合や祈りへ深く膝を折る	弘子	遠雷やちびりちびりとブランデー	全
近く来よ小首傾げよ雀の子	全	風薫る行方決まらぬ蔓の先	彦十
愛犬へ吹くハーモニカ桜の実	全	大川を渡る明け暮れ夏燕	全
はるばると林檎の花に会ひにゆく	全	色男にや見えぬ大足桜桃忌	全
夏の暁妻の寝息のありにけり	青史	その昔の人喰ひ川なり五月果つ	全
粽結ぶ指たをやかに笹じめり	全	なんとまあ神田川にもカワセミが	稻垣真澄
胡瓜揉むあるべうもなきことなりき	全		
翼あらば引鶴追うて北へ飛ぶ	全		
淡彩のはけのをちこち山桜	紀久男		

—「森の座」八月号

三 「自詮・松浦加古集」より小生好みを抄出してみました。

海恋し鴟多き地に慣れゆくも	花の夜の語られ続く生死かな
鯖雲を繰り出してをり樗大樹	円空仏に金粉降らす山の火蛾
風絶えて夜の山々の姪始	極月や舞台に死者の蘇る
山霧や今歩かねば道消ゆる	鶴鴿の蛇と闘ふ静けさよ
ちちははと雪の昼餉のきなこ餅	背伸びして墓に見えるる冬の海
全山の力抜きたり朴落葉	枯るる色いとほし枯るる音さらに
	未知の地へ己れ放たん青嵐

四 昨年七月亡くなつた永六輔（俳号・六丁目）遺句より小生好み八句。

鰻待つ間に話がこじれたり	七五三八九三の孫も愛らしく
ずつしりと水の重さの梨をむく	夏場所でグルジアロシアを叩きつけ
寒月が三つに見えて終電車	呑む打つ買う卒業をして認知症
その昔坐れば牡丹今立てず	看取られる筈を看取つて寒椿